史跡 大船遺跡

北海道南部の函館にある大船遺跡では、大規模な集落の証拠（紀元前 3200 年頃）が出土しています。考古学的調査により、100 を超える竪穴建物跡の基礎、墓、貯蔵穴や大量の土器・石器・動物の骨を含む盛土が発掘されました。これらの発見から示唆されるのは、この遺跡にはほぼ 1,000 年にわたって人が住み続けた、ということです。

望ましい位置

大船遺跡は、大船川に沿って広がる、太平洋に面した台地上に位置しています。この遺跡では、炭化した粟やオットセイ・マグロ・サケ・クジラ・シカの骨が見つかっています。この遺跡にあった集落の人々は、海で魚を獲り、海岸沿いで狩りをし、森で食料を集めていたのでしょう。

大船遺跡の竪穴建物跡

この遺跡の住人たちは、竪穴建物で暮らしていました。竪穴建物とは、木の柱に支えられた建造物で、その中は、地面を掘った仕切りのない居住空間になっていました。考古学者は、竪穴の外縁と柱が立てられていた穴の位置を明らかにします。大船遺跡では、120 近くの竪穴建物跡の基礎が発見されてきました。その多くは重複しており、新しい建物がそれより古い建物の場所に建てられたことを示しています。

この遺跡で発見された竪穴の中には、深さが 2m を超え、縦横の長さは 10m 近いものがあります。他のほとんどの遺跡では、これほど縦横が長くも深くもない竪穴が一般的です。最も大きな基礎のいくつかは、発掘された状態で保存されており、この遺跡にあった建物の規模を感じることができます。

珍しい発見

考古学者は、1 つの建物の地面の下に小さな穴を見つけました。その底には、黒くなった土がありました。土壌を分析した結果、胎盤のものと考えられる生物由来物質が確認されています。胎盤を埋めるという行為は、祭祀上何らかの重要性を持っていたのだろう、と考古学者たちは推測しています。かつての日本の文化には、新しく生まれた子どもの健やかな成長を願って、その胎盤を家の玄関に埋める慣習がありました。

工芸品の宝庫

この遺跡では、長さはほぼ 80m、幅は 10m ある大規模な盛土が発見されています。この盛土からは、大量の土器、石器、動物の骨、またシカの角から作られた縫針などの工芸品が出土しました。この盛土の中では竪穴式墳墓も見つかっており、そこで火が燃やされたことが確認されています。この盛土は、祭祀の場として、また道具を置く場所として機能していたと思われます。

土器：意匠と特徴

大船遺跡の土器は、この遺跡に 1,000 年近く人が住み続けていたことを示しています。ここで発掘される土器は底の平らな円筒形で、模様とデザインはかなり多様です。考古学者たちは、土器の形とデザインから、日

本の先史遺跡の年代を特定することができます。また、各遺跡にどのくらいの期間、人が住んでいたのかも把握できます。大船遺跡で発掘された土器のデザインには、明らかな変化が見られます。これは、大船遺跡に長い間にわたって人が住んでいたことを示しています。より古い時代の土器の装飾はあまり手が込んでおらず、その縁は単純です。一方、後の時代の土器の特徴は、縁の様式があり、飾りが取り付けられていることです。

函館市縄文文化交流センター

大船遺跡からの出土品は、垣ノ島遺跡 [\[リンク\]](#) の隣にある函館市縄文文化交流センター [\[リンク\]](#) に展示されています。このセンターは、日本の国宝である中空土偶など、この地域にあるいくつかの遺跡からの出土品を展示しています。このセンターは、大船遺跡から車で5分のところにあります。

関連遺跡

大規模な集落は、他に御所野遺跡 [\[リンク\]](#)（岩手）や三内丸山遺跡 [\[リンク\]](#)（青森）で発見されています。三内丸山遺跡は、日本最大級の縄文遺跡です。